

しもべ  
説教 『 キリスト・イエスの僕たち 』

小河信一 牧師

フィリピの信徒への手紙 1章1節～2節

<sup>1</sup> キリスト・イエスの僕であるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。

<sup>2</sup> わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

2013年度、茅ヶ崎香川教会に、〈教会標語〉「神の国をめざして歩む教会」が与えられ、フィリピの信徒への手紙 2:10-11 を中心聖句として歩んでいます。具体的には「礼拝を重んじる」ということが課題です。

私たちが、神の国へ向かって前進して行くとき、<sup>おの</sup>自ずからそこに、秩序や規律が生まれます。なぜなら、私たちは、キリスト・イエスの忠実な兵卒（Ⅱテモテ 2:3）なのですから。大切なのは、秩序や規律それ自体ではなく、「信仰は一つ」（エフェソ 4:5）の下に、整えられていくということです。具体的には、週ごとの礼拝を通して、私たちの信仰生活が整え直されるということです。

聖霊の自由なる導きの中に、良い意味で私たちの予測が裏切られ、人知を超える神の御業によって、礼拝が、伝道が、そして、日常生活が整えられ、道筋がつけられていくのは、まことに感謝すべきことです。私たちが、主イエス・キリストの恵みを受け止め、十字架と復活による救いの業を深く知るとき、私たちは人生で出遭うさまざまな〈牢獄〉から解放されます。その時、天の国にふさわしい秩序や美しさが、解き放たれ自由にされた私たちの間に宿ります。

そこで、そのような消息を伝える出来事を旧新約聖書の中から取り上げましょう。

人の罪が蜘蛛の巣<sup>すさ</sup>を張ったような荒んだ〈牢獄〉の奥底で、天よりの力により、美しい讚美歌が奏でられるというのは、絵空事ではなく、聖書が告げ広めている現実です。そこでまず、紀元前6世紀のバビロン河畔の牢屋〈監禁状態〉を訪ねてみましょう。

詩編 137——

1

バビロンの流れのほとりに座り

シオンを思って、わたしたちは泣いた。

2

豎琴は、ほとりの柳の木々に掛けた。

3

わたしたちを捕囚にした民が

歌をうたえと言うから

わたしたちを嘲る民が、楽しもうとして

「歌って聞かせよ、シオンの歌を」と言うから。

ユダ王国が瓦解した後、この詩編の詩人は、バビロンへ都落ちしてしまいました。詩人は、人生に絶望し、敵に対する憎しみから、「シオンの歌」が歌えなくなっています。詩人の伴侶ともいえる豎琴は、柳の木々で風に揺れながら、どんな「想い」で詩人を見つめているのでしょうか。また、その豎琴の「想い」を知る詩人は、どんなにか辛いことでしょうか。

しかしながら、歌がうたえないという状況から、類まれな<sup>たぐい</sup>哀しい歌、まさしくも新しい歌（詩編 96:1）が生み出されているのは、驚きです。情景を想像してみれば、これぞ歌の世界……異国、川の流れ、木陰の無聊（<sup>ぶりよう</sup>退屈さ）、恨み辛み、望郷の念……人が共感するモチーフ満載ですね。

捕囚に連れ去られたユダヤの民は、現実にバビロン帝国の支配下に置かれ、さまざまな拘束に遭っていました。私たちがしばしば陥る牢屋〈監禁状態〉には、煩雑な人間関係はじめ、名誉、財産、過去の秘められた出来事、復讐<sup>とりこ</sup>などがあります。詩人が虜となっていたことの一つは、最後に挙げた、敵・加害者への復讐です。

詩編 137——

8

娘バビロンよ、破壊者よ

いかに幸いなことか

お前がわたしたちにした仕打ちを

お前に仕返す者

9

お前の幼子を捕えて岩にたたきつける者は。

「そんな事を言っ<sup>た</sup>てはいけません」とお説教を垂れる人は、世の苦難や不条理を、また、それに伴い身心の衰弱した人の内面を顧みるべきでしょう。ここで例えば、凄惨な交通事故によって子供を亡くした親の心を、加害者に対する「復讐」心と呼ぶことは必ずしも適切でないかもしれ

ませんが、その疲弊した心に寄り添う人、すなわち、打ち明けられる人を必要としています。詩編 137:8-9 で吐露されている言葉から、私は逃げるのか、あるいは、私は留まるのか、です。

嘲る者や破壊者に対峙すると共に(いやそれ以上に)、詩編の詩人が苦しんでいたことは、「エルサレムよ もしも、わたしがあなたを忘れるなら」(詩編 137:5) また「もしも、あなたを思わぬときがあるなら」(同上:6) という言葉から窺い知ることができます。

それは、異郷の〈牢獄〉にいる私たちに、神は寄り添ってくださっているのか、という神信仰の問題でした。「私が忘れるなら～されてもよい」という痛切な二重の誓いは、裏を返せば、神信仰が揺らいでいることを示しています。詩人は、根本的に「あなた(神)は私を忘れていない」また「あなたは私を見捨てておられない」こと、すなわち、〈神の臨在〉に確信が持たなくなっているようです。それは、ほんの一時だけと、自分でごまかして、神ならぬものに頼ってしまう信仰の危機でした。

突如、私たちに迫り来り、私たちを覆ってしまう牢屋〈監禁状態〉は、〈神の臨在〉を曇らせる影である——このことが、主イエス・キリストの聖誕・受肉の前に露わにされた難題であったと言えるでしょう。

それでは、紀元後1世紀中葉、小アジア、エフェソの監獄(フィリピの信徒への手紙の有力な執筆場所)からパウロが、ギリシアのフィリピへ書き送った手紙を読みましょう。

コリントの信徒への手紙 Ⅱ 11:23 によれば、パウロは投獄された多くの経験を持っていました。パウロは、現実に牢屋〈監禁状態〉に置かれていた者として、どのように神信仰を保っていたのでしょうか？

フィリピの信徒への手紙1:1——

キリスト・イエスの僕しもべであるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。

「キリスト・イエスの僕(原文:複数形「僕たち)」——ここで私たちが第一に留意すべきことは、次の点です。パウロは、ローマ帝国の支配下にある受刑者であるという点で、監獄に入れられた奴隷、言い換えるならば、ローマの奴隷です。しかし、ここでパウロは、自分が「ローマの奴隷」と同時に、自分が「キリスト・イエスの僕」と宣言しているではありません。パウロは、「ローマの奴隷」を含めて他の何の奴隷でもない、ただ「キリスト・イエスの僕」であると言い切っています。今のパウロにとって「ローマの奴隷」か、あるいは「ローマの市民」(使徒言行録 22:28)かは、眼中に無いことです。

どんな状況にあっても、貧困でも富裕でも（フィリピ 4:12）、パウロはいつでも、主イエス・キリストとの関係、すなわち、主との堅い絆に軸足を置いています。パウロは、主の僕として、キリストのものになりきっています。日々に、キリストにつながれて、死に、そしてよみがえることがすべてで、生き延びるか、あるいは、処刑されて死ぬかは、まったく主にゆだねられていました。パウロのまなざしは、牢獄の壁を突き抜けて、ひたすら天国の門を見つめているかのようです。

「キリスト・イエスの僕<sup>しもべ</sup>たちであるパウロとテモテから」——どうして、パウロは差出人を連名にしたのでしょうか？

テモテは、「キリスト・イエスの僕」と呼ぶに値する（フィリピ 2:22）から。そうでありましょう。しかし、弟子のテモテからいくつかの洞察を受けているとしても、実質的にフィリピの信徒への手紙は、パウロの個人の真筆です。

では、なぜでしょうか？ パウロの伝道者としての姿勢<sup>おもんばか</sup>を慮<sup>おもんばか</sup>って言うならば、主イエスから「パウロとテモテ」として、この伝道教会の手紙を書くように指し示されたからではないでしょうか。

マルコ福音書 6:7 十二人を派遣する——

そして、（イエスは）十二人を呼び寄せ、二人ずつ組にして遣わすことにされた。

パウロは、十二弟子への命令をそのまま、自分たち二人に当てはめているのではないのでしょうか。パウロが常に主イエスの教えに従って伝道生活をしていることは、彼の手紙のそこかしこに証しされている通りです。このようにパウロにとって、同じ信仰を持った人たちと一緒に伝道することは、大きな誇りであり喜びでした。

そして、生い立ち、年齢、民族性（テモテの父はギリシア人）など異なる二人、「パウロとテモテ」の主にある霊的な絆こそ（マタイ 18:20）、隔絶したこちらエフェソ〈アジア〉とあちらフィリピ〈ヨーロッパ〉とがつながれる力の源でした。

フィリピの信徒への手紙 1:1——

キリスト・イエスの僕<sup>しもべ</sup>であるパウロとテモテから、フィリピにいて、キリスト・イエスに結ばれているすべての聖なる者たち、ならびに監督たちと奉仕者たちへ。

パウロに、「キリスト・イエスの僕<sup>しもべ</sup>」と自己紹介されて、では、自分たち、フィリピの教会の者は、何と呼びかけられるのかと、一瞬、息を呑<sup>の</sup>んだのではないのでしょうか。彼らの胸に、そ

っけなく一括して「ガラテヤ地方の諸教会へ」と挨拶を送られたガラテヤの信徒への手紙(1:2)の事例がよぎったでしょうか。

当時のガラテヤ教会とは違って、自分たちとパウロとの関係は、主において良好であるはずだが……、と考えているうちに、パウロから「キリスト・イエスに結ばれている(=~の中にある)すべての聖なる者たち」と呼びかけられました。

到着したばかりの手紙を読み聞かせてもらおうと集っていたフィリピの教会の人たちの間に、主にある感謝が湧き上がってきたことでしょう。

畏れ多くも、私たちは「キリスト・イエスにある聖なる者たち」として召されている——フィリピの人たちは改めて心に刻みました。

「聖なる者」とは、「この世から分離された者」であり、「神のものとされた者」であります。キリスト教徒が「聖なる者」であるゆえんは、「キリスト・イエス」が彼 / 彼女を聖別してくださったからです(G.フリードリヒ。I コリント 1:2 参照)。

元来罪深い人間は、キリスト・イエスとの結び付き〈キリストにありて / エン・クリストイ〉(フィリピ 1:1、ガラテヤ 1:22、2:4)によって、悔い改めさせられ、神の<sup>きよ</sup>聖さにあずかることを許されました。私たちは、何の功績も持たないにもかかわらず、主イエスは私たちを愛し抜き、また、父なる神は私たちを「わたしの宝」(出エジプト記 19:5)とし、離れずに私たちを守ってくださいます。

今、皆さんは気付かれたでしょうか。実は、「キリスト・イエスの<sup>しもべ</sup>僕」もまた「キリスト・イエスにある聖なる者」も、キリストまたは神のものになりきっている者という同一の意味を持っています。

違いは、十字架につけられ、私たちの罪の縄目を解き放たれた受難のキリストから観るか、あるいは、復活・昇天により罪を悔い改めた私たちを聖なる天につないでくださったキリストから観るか、にあります。パウロは、「キリスト・イエス」において一つのこと〈十字架から復活、そして昇天へと至る福音〉の中軸を明示しつつ、こちらエフェソからあちらフィリピへ、二つの同義の名称によって呼び交わしたのです。その時、地中海を<sup>はさ</sup>挟み、エフェソとフィリピの間に、虹の橋が架け渡されたかのようなようです。世俗語〈僕・奴隷〉と宗教用語〈聖なる者〉のミスマッチと思った人は、少しかつだったでしょうか。

何気ない挨拶の中に福音の真実を豊かに盛り込む——パウロはまさに言葉による〈福音宣教者〉です。

フィリピの信徒への手紙 1:2——

わたしたちの父である神と主イエス・キリストからの恵みと平和が、あなたがたにあるように。

「キリスト・イエス」（1:1 2回）から「主イエス・キリスト」（1:2）へ——手紙の発信者と受信者の提示から祈りへという流れの中で一貫しているのは、「イエス・キリスト」です。これによって、この手紙の内容の要<sup>かなめ</sup>が、「イエス・キリスト」にあることが分かります。

パウロは、「恵み」と「平安」があなたがたにあるようにと祈っています。

本来「恵み」は、「賜<sup>たまわ</sup>ったもの」という意味で、神から人へという線が明確です。その上、「無償で」というその含意から、主イエス・キリストの十字架による一方的な罪の赦し及び人間の側のいさお（功績）の無さがしっかりと捉えられるありがたい言葉です。その「恵み」のありがたさに対するパウロの感謝は、次節（1:3）にあらわされています。

こういう訳で、この神からの「恵み」が捉えられると、「キリスト・イエスの僕」という意味がより深く理解できます。

キリストは天にあって神の御子であったにもかかわらず、罪の奴隷になっていた私たちを救うために、自ら罪の奴隷になってくださいました。御子は罪なきお方ですが、十字架上ですべての人間の罪を背負われたのです。フィリピの信徒への手紙の「キリスト賛歌」では、十字架と復活の出来事を貫いて、主イエス・キリストは、〈僕<sup>しもべ</sup>〉の身分になった（2:7）と歌っています。この御子のへりくだりによって、罪の奴隷であった私たちは解放され、キリストの愛に生きる奴隷につくり変えられたのです。

パウロは、「恵み」、すなわち、神から「賜<sup>たまわ</sup>ったもの」を日用の糧とする奴隷として、フィリピの隣人にも「恵み」が増し加えられるように祈りました。

さらに、パウロは、キリスト者の「恵み」による生活が必ずしも順風満帆に行かないことを知る練達した伝道者として、「平和」（シャローム：平安）の挨拶を送っています。パウロは、敵、異郷、牢獄、苦難など、波風や嵐のただ中において、神の「平和」は揺らぐことがないことを、そして、キリストが私たちを導いて、神との平和から人との平和へという通路を歩ませてくださることを信じていました（ローマ 5:1、エレミヤ書 29:7）。

主イエスのエルサレム入城の際、人々は、そして子供たちは「ダビデの子にホサナ」（マタイ 21:9,15）との叫び声を上げました。今や、私たち、キリスト者にとって、主イエス・キリストの十字架の道行きこそ、すばらしい讚美歌になっています（例えば讚美歌 130 番「よろこべや」）。使徒言行録 16:25 に、フィリピの牢屋で「真夜中ごろ、パウロとシラスが賛美の歌をうたって神に祈っていると、ほかの囚人たちはこれに聞き入っていた」と証言されているように、私たちは人生のどん底の暗がりの中でも、キリストの恵みにより神をほめたたえる平安が与えられてい

ます。それ故に、私たちは、現下の自分の苦境を重ね合わせながら、豎琴をかけがえのないものとしたバビロン捕囚の民をしのび、神讚美へと導かれるよう、神の平安を祈り求めることができます。

パウロはフィリピの信徒への手紙を、一見、自己卑下の極<sup>きわ</sup>みとも思われる呼称、「キリスト・イエスの僕<sup>しもべ</sup>たち」から書き出しました（他に年代的にフィリピに続くと思われるローマの信徒への手紙の 1:1）。いとも鮮やかに、自分はふつつかな〈僕〉（ルカ 17:10）であり、ただキリストによってのみ生きているということが打ち出されています。それが、パウロの誇りでした（IIコリント 11:21-23）。牢屋<sup>い</sup>に居ながらも、主キリスト以外あらゆることの〈監禁状態〉から解放されていました。

エフェソの教会、別の名を「牢獄教会」にいたパウロには、神より、周囲のものを聖なる光へと招き入れる〈闇の中の輝き〉が与えられていたのです（フィリピ 2:15）。

手紙の冒頭で一言、相手に語りかける中に、福音の真髓の凝縮された言葉を用いているパウロ、また、そのように、神の恵みと平和に満ちた言葉を語らしめる聖霊の働きをしっかりと受け止めたいと願います。